

金子金治郎

連歌師と
紀行

桜楓社

金子金治郎

連歌師と
紀行

江苏工业学院图书馆
藏

桜楓社

金子金治郎（かねこきんじろう）

明治40年 長野県に生まれる

昭和8年 広島文理科大学卒業

現在 広島大学名誉教授

著 書 連歌師兼歌伝考 菟玖波集の研究（学士院賞） 新撰菟玖波集
の研究 宗祇旅の記私注 連歌俳諧集（共著）連歌古注釈の研
究 七賢時代連歌句集（共編） 宗祇句集（共編） 連歌古注
釈集 連歌貴重文献集成（14冊編）心歌の生活と作品 宗祇の
生活と作品 連歌論の研究 宗祇名作百韻注釈 連歌研究の展
開 連歌総論（編）

住 所 259-01 神奈川県中郡二宮町百合が丘1-11-2

連歌師と紀行

成2年 5月 25日 初版印刷

平成2年 6月 1日 初版発行

著 者	金子金治郎
発行者	坂倉良一
印刷	共信社印刷所
製 本	株式会社開製本

発行所 株式会社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町1-3-1
(郵便番号) 101 (振替) 東京6-18020
(電話番号) 03-295-8771(営業)
03-295-8774(編集)

検印は省略いたしました。

©K. K. 1990 Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが落丁乱丁の際はおりかいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-273-02389-X C1092

連歌師と紀行 目次

【Ⅰ】連歌師の時代

1 連歌師の発生	7
2 連歌師の活動	12
3 女性の連歌師	16

【Ⅱ】連歌師の生活

1 連歌師の出身	21
2 連歌師となる動機	28
3 連歌師の家庭	33

【Ⅲ】連歌師の系譜

1 系譜の視点と地方	54
2 師弟の系譜と問題点	60
3 師弟から親子へ	65

4 北野会所奉行・宗匠	70
-------------	----

【V】連歌師の古典研究と庇護者

1 連歌師の古典研究	78
2 連歌師の庇護者	88

【IV】連歌師の紀行

1 はじめに	97
旅のあはれ 古人も多く旅に死せるあり 連歌師の紀行	
2 梵灯庵の道の記	109
梵灯庵略年譜 梵灯庵道の記	
3 宗祇の紀行	124
まえがき 白河紀行 筑紫道記（おろかなる心一すちにひかれて 舟行 海辺 唯今のあはれ 社参・博多千句）	
4 宗碩の紀行	130

佐野のわたり

5 宗長の紀行	158
---------	-----

まえがき 東路の津登 宗長手記（六年の歳月 自然と描写 友情・哀話
異なる文体 炉辺の閑談）

6 宗牧の紀行	182
---------	-----

東国紀行（まえがき 動乱の世の旅 西郡千句と後北条連歌 子を思う）

7 紹巴の紀行	201
---------	-----

まえがき 富士見道記 天橋立紀行

あとがき	217
------	-----

連歌師と紀行

本書は、桜楓社創業三十周年記念事業として開講した大学院講座のうち、昭和六十一年五月二十七日から七月二十九日の毎火曜日に「中世の連歌師」と題して講じられた講座内容を収録したものである。刊行にあたり著者の補筆を得て「連歌師と紀行」と改題した。

【I】連歌師の時代

1 連歌師の発生

早い時期の「連歌師」の使用例の、うち連歌師の輪郭のある程度想像できるのは、しばしば引用されている『太平記』巻七、千劔破攻め（元弘三年）の条である。攻めあぐねた関東勢が、「花下の連歌師共を呼下し、一万句の連歌をぞ始たりける。」とあるのがそれである。ここで花下といい、一万句といえは、必然的に、「元応二年（三〇）春の比、鎌倉の花下にて一日一万句の連歌侍けるに」（『菟玖波集』巻二〇発句）を連想させる。その間、一三年と近接している。千劔破攻めの万句興行も、架空のこととは思われなところがあり、そのための人数として、「花下の連歌師共を呼下し」たのも実際のことと思われる。この連中が加われば、武士たちだけよりも、はるかに活気が加わり、連歌の興も倍加するは必然である。

「連歌師」の使用例として、これを元弘三年の時点で扱ってよいか否かは、もちろん問題である。しかしそれから四〇年ほど後の『筑波問答』（応安五年）では、「女房連歌師」「女の連歌し」など、広義の用法がしきりに見えている。すでに十分浸透していた結果と思われるのである。次の例は、時期不明であるが、すくなくも鎌倉末期までは溯るかと思う。『菟玖波集』巻十九誹諧の部に次の付合があ

る。

連歌はてゝ人のねたりけるに

連歌師はみなふし物に成にけり

といひければ

九〇何木をとりてまくらにはせむ

この前句の「連歌師」が一つの用例であるが、時代ははっきりしない。しかしそれ程古いものでないことは、何木の単式賦物であることから推察される。かと言って、賦物が発句・脇・第三までといった良基時代でないことも、「まくらにはせむ」と苦吟するあたりに伺われる。それから考えて、「みなふし物」のみなは、皆寝てしまったというだけでなく、「賦物」の取り方を指示するみなであって、まさに百韻の全句に賦物を取る鎌倉期後半の反映と言ってよいように思われる。『太平記』千劔破攻めの「連歌師」も、その当時の慣用と考えて誤らないと思われる。

ところで千劔破攻めの用例で、「花下の連歌師共」とあった花下には、鎌倉花下一日万句への連想の外に、当然のことながら、寛元^(三年は二四五)、宝治^(三年は二四九)の花下連歌を想起させる。というよりも花下連歌を抜きにしては、「花下の連歌師」の呼称の成立は考えられないわけである。連歌師の呼称が、花下連歌時代から存したか否かではなく、連歌師と呼ばれる人々の出現にとって、花下連歌は欠くことのできない温床であったという意味である。具体的にいえば、寛元・宝治の花下連歌では、道生・京月・寂忍・無生といった人々の活躍が伝えられている。『菟玖波集』の中から、その活躍を伝える詞書の一部をあげてみる。

道生法師（入集一六句）統拾遺集一首（九七三）

六一 寛元三年三月毘沙門堂花下の連歌に

六二 寛元四年三月地主の花下にて

六七 宝治二年三月毘沙門堂の花下にて

京月法師（入集六句）清水寺僧（承久單物語）
統拾遺集一首（五〇二）

一九 寛元四年三月花下の連歌に

寂忍法師（入集一八句）人家和歌集に
寂忍三首

三七 寛元四年三月法勝寺の花下にて

三六 宝治二年三月花下にて

無生法師（五句入集）深草に住み、立信上人
と為氏の連歌に発句（井蛙抄）

三八 宝治元年三月毘沙門堂の花下にて

五二 鷺尾の花下の連哥に

花下連歌の作者、時期の範囲、場所の全部が分るように抽出してみた。『筑波問答』は、「道生・寂忍・無生などいひしもの等、毘沙門堂・法勝寺の花下にて、万の者多く集めて、春ごとに連歌し侍し」とあるから、道生・寂忍・無生はとりわけ中心的な人物であり、毘沙門堂（上京区出雲路にあった天台寺院。桜花の名勝）・法勝寺（左京区岡崎、鴨川の東にあった白河天皇の勅願寺）は、主要な舞台であったことが知られる。その毘沙門堂の連歌には、次のような場面もあった。

出雲路の毘沙門堂ニテ、人々連歌シケルニ、

ウスクレナヒニナレルソラカナ

ト云句ニ、ツケ煩テ、三十余句返テケレバ興モナカリケルニ、東入道ノシノビテ聞ケルガ

アマトブヤイナヲホセ鳥ノカゲミヘテト付タリケル。時ニトリテ、ワリナカリケル事ニ語伝ヘ侍リ。其座ニ、花下ノ十念房アリケリ。「アマトブヤ」ト、ウチ出タリケレバ、「アワ、ツキ候スルハ」トゾホメケル。心ハヤクコソ覺レ。(沙石集、卷五末)

鎌倉の武家歌人として著名な、東胤行、入道して素暹の名譽の付句の話であるが、この句は、『菟玖波集』卷十四に採択されている。その詞書は、「建長の比叟沙門堂の花下の連歌に」とあって、時期を明らかにしている。宝治四年が建長元年であるから、前記花下連歌に続いている。この素暹は、寛元五年(二月廿八日)に同族千葉秀胤の事件に連座し、鎌倉を離れた牢浪の身である。もう一人の「花下ノ十念房」は、俗名を橘家季と言ひ、琵琶の家に生れたが、本業の方は天骨に恵まれず、連句の機智のみが喧伝され、ついに数寄者として終ったと言われる。『文机談』が語る輪郭である。花下連歌には、年々奈良から上ったという。(島津忠夫氏「連歌史の研究」五六頁)本業からは疎外者であつたが、連句・連歌への数寄者として名を残すことになった。素暹の牢浪といい、十念坊の疎外者といい、花下連歌の有力者たちが、どんな人々であつたかを推察させるものがある。

道生・寂忍・無生が、どんな階層で、どんな生活ぶりであつたか、それはよく分つていない。これまでの諸家の研究の結論は、各人の割注に略示した。たとえ一首でも勅撰集入集となれば、無名とは言えない。しかし歌壇から見れば、末流に過ぎないことも事実である。歌壇の中樞とは無縁な、周辺的存在、それがこれらの人々である。しかし連歌史にとっては大切な存在である。この中道生は、花

下の連歌式目の作者として知られている。(冷泉家蔵 千目録)花下の新式は、後世の連歌新式の本になるが、それに対して、道生等の式目は、花下の本式と考えられている。式目はその他諸家の作があるが、それは今一々あげない。要するに道生等による式目が、花下連歌の時代に早くも発足していたことが重要である。こうした事実を踏まえたところに、良基による次のような史的位置づけが行われる。

連哥ハ日本武尊ノ筑波ヲ源トシテ、佐保川ノ流ヲウケ、代々ノ勅撰ニ加ヘラルレドモ、皆上古ノ風体ニテ更ニ可用姿ナシ。貫之、躬恒ガ口伝モナク、定家、々隆ノ趣向モトバメズ、只花下幽人、月前吟客道生ナド云シ物、地下ノ風体ヲ仕出しテ、次第ニ天下ニ流布セル也。近來善阿ト云シ堪能ニテ、門弟ト号ル輩ノ其体ヲ得タル、救済コトニ名譽ス。古今ニ冠絶スル故也。當時ノ風多ハ彼ノ趣ナルニヤ。但周阿ナド仕シハ、又一体ヲ仕出シ様ニ覺ヘ侍シナリ。(九州問答)ここには、地下連歌の風体が花下の道生に始まったこと、その後、善阿・救済と発展したことが、太い明確な線で描かれている。救済・周阿の当代連歌には、良基自身も含まれるはずであるが、その源流を、「花下幽人、月前吟客」の道生に見定るあたり、鮮かという外はない。

当面問題にしているのは、連歌師であったが、連歌師の源流となれば、救済から善阿へ、善阿から道生の花下連歌へと地下連歌の流れを溯ることが、探索の当然の道筋となる。「連歌師はみなふし物になりけり」の連歌師も、もちろんその流れの中のものであり、千劔破攻めの「花下の連歌師共」もそうである。花下連歌の道生・寂忍・無生の徒を連歌師と呼んだ証はないが、その人々を連歌師の源頭と考えることはそれほど不自然ではないと思う。地下連歌の風体が彼等から始まるとする良基の認識が、この場合強力に支えてくれるようである。十三世紀の半ば寛元・宝治(一二四三)が、時期的な目

安であり、階層としては勿論地下、牢浪の者あり、疎外者ありということであった。

2 連歌師の活動

連歌は二つの隆盛期を持つが、その二つとも、連歌師の活動が主要な推進力になっている。十四世紀の中葉に、二条良基が撰者になって、『菟玖波集』(延文元年 一三五六年)が成立し、これが准勅撰となって、連歌史の第一の隆盛期を象徴する。もちろん若い公家貴族の学識と連歌数寄が大きな要因であるが、救済を中心とする地下連歌師の新風連歌の盛り上りがなければ、あの隆盛はありえなかった。善阿の門人としては、救済のほか、順覚・信昭・十仏・良阿などがおり、救済の門人には、周阿・素阿などがいた。時代は鎌倉から進出した武家文化と、京の公家文化が混交し、連歌界は「京鎌倉ヲコキマゼテ一座ソロハヌエセ連歌」と評された混沌期であった。それだけに活気に満ちており、地下連歌師は縦横に活躍することができたわけである。

連歌史の二つめの隆盛期は、十五世紀末の応仁の乱前後にくる。『新撰菟玖波集』(明応四年 一四九五)を地下連歌師の宗祇が中心になって撰集し、二番めの准勅撰集になったことが、その隆盛を象徴している。撰集に当たって宗祇は、心敬(二四句)、宗砌(二二二句)、専順(一一〇句)を上位入集としているが、この三人は、宗祇の師事した地下の連歌師たちである。この外宗祇自身(六二句)、兼載(五三句)、宗長(三九句)などが上位を占めている。地下連歌師が、連歌界の牽引力であったことが、これらの数字によく示されている。なお、『菟玖波集』と『新撰菟玖波集』の間の時期で、『新撰菟玖波集』が採択

しなかった応永期に、梵灯庵のような注目すべき作家がいる。武家出身であるが、後半生は地下連歌師として行動している。

宗祇没後の十六世紀は、戦国時代となるが、地下連歌師の活躍は、ますます活発である。宗碩・宗牧・宗養、里村昌休・昌叱、同じく紹巴と、数多くの地下連歌師が輩出している。紹巴は特に織豊時代の連歌界の第一人者で、第三の連歌撰集も計画したが、これは残念ながら成功しなかった。なおこの時期になると、宗牧の子宗養が連歌師の家を嗣ぎ、昌休の子昌叱、さらにその子孫が里村（南家）の家を嗣ぎ、紹巴の子孫が同じく里村（北家）の家を嗣ぐといった世襲の現象が起り、連歌師が本来の活力を失う原因にもなっている。ことに南北里村両家が、徳川幕府の連歌師となり、その在野性を喪失するに及んで、連歌は大衆から離れた存在となり、新興の俳諧に席を譲っている。

連歌師の時代の始終を略述し、その間の主要な作者を紹介してきた。著名な中でも特に著名な連歌師たちであった。いうまでもなく、こうした作者たちを支える背後には、実に数限りない連歌数寄がいる。その多くの連歌数寄に迎えられて、指導的な役割を果たすのが連歌師である。『七十一番職人歌合』の六十六番は、「連歌し」と「早歌うたひ」を左右に番えている。その連歌師は黒衣の僧体。傍に執筆の少年が文台を前に控えている。連歌の興行に欠かせない組合せである。『職人歌合』には、生業のための職人の外に、禅宗・律家・念仏宗・法華宗などの僧侶等もあげている。それぞれその道を専らとする者を指すと思われる。連歌師もそれであって、連歌を専門にする人である。もちろん専門にも様々ある。本業は別にあるが、連歌も玄人だといった人々から、連歌を文字通り職業とする人々まで、様々の段階がある。「連歌師」という言葉の用例を見ても、様々な段階を反映して、ニユア

ンスの相異を示している。

二条良基の用例も様々である。「弁内侍、少将内侍などいふ女房連歌師」「御腹取の尼とて七八十になる連歌師」(祝波問答)などは、連歌数寄の女房という程度に解されるが、

連歌士ノ有様、此比ハ皆人ヲ威サントハケ／＼シク、様アリゲニシタレドモ、花真ナケレバ只無所詮也。イツモ云様ニ、有ノマ、ニ謂下タル句ノ、ヤサシク聞ルガ上手ニテアル也。救済ガ風体コトニ肝ニ染テ覚ナリ。コレヲ亀鏡トスベシ。周阿が句作ハ、コマカニクダキタルヲコノミシ也。
『連歌十様』

になると、明らかに救済・周阿のような第一級の連歌師を含む専門の連歌師を問題にしている。良基には他にも用例はあるが、省略しておきたい。

次は、救済の門人波多野肥後守通郷を連歌師と呼ぶ場合である。『古今連談集論・下』に「きうせい(救済)の道を中比我もく／＼とまなばれし人／＼は、成阿・平井・通郷・玉琳・覚阿・河村等也。」とあり、『初心求詠集』に、

大原侍公の庵室にて

ちるほかの名残は花の老木かな 波多野(肥後守)通郷

とある通郷である。この通郷を「地下之連歌師」と呼ぶのは、『教言卿記』応永十五年三月廿一日、將軍義満の北山殿に後小松天皇をお迎えして催した連歌会の記事で、その中に「元喜入道地下之連歌師也被召加之、尤眉目無極者歟。」とあるのがそれである。この元喜入道が通郷であることは、『花宮三代記』や『御評定着座次第』などを辿ることによって知られるが、今は省略する。北山殿のこの時の連歌